

2. 思いで

中村 剛

資料センターに助手と技官のポストが認められ、助手として採用されたのは1972年12月なので、もう25年前になる。技官は森崎という22歳の美しい方で、秘かに胸を焦がしていたが、話す間もなくガンで亡くなられた。数年後には学会議の報告もあり、現在の定員と専用の建物が認められ、調査部には植村先生（現在都留文科大）、森先生（現在長崎女子短大）、三根先生、細野先生（現在筑波大）、近藤先生、田中さん、深堀さん、それに100名を越える非常勤職員の方々が順次加わった。皆まだ20代であった。その頃のことは、岡島先生の退官記念に発行した「12年誌」に詳しいので省略するが、皆、偶然迷いこんだ医学部という未知の世界で、新分野を開拓する夢を持っていた。岡島先生が、我々を強制することなく夢を育てて下さった指導力には、今になって感嘆する。偉大な指導者に恵まれたのが幸運であった。

資料センターが管理する被爆者診療録データベースは、12万人という規模とほぼ100%の追跡精度という、世界に類を見ない学術資料である。循環器系疾患の疫学で有名なフラミンガムコホートでも5209人に過ぎないことを考えると、屋久杉に続く人類の世界遺産に指定されてもおかしくない。このデータベース作成には多くの恩人がいた。計画の段階から貴重な医学的助言を賜った戸田隆義先生（現在琉球大学）並

びに長年に亘りデータベースの研究利用に関して指導を賜った野瀬善明先生（九大医学部）は医学に素人の我々にとって、神様のように有り難い存在であった。その他、関連病院、関連機関のデータベース作成に向けての絶大な御協力には何度も救われる思いがした。とりわけ市役所の田中国重氏（現在退官）は被爆行政の生き字引であり、市と大学が一体となった被爆者健康管理システムの実現にも協力を惜しまれなかった。他にも多くの方のお名前を上げたいが、字数の制限もあるので、失礼することをお許し願いたい。

大学では位相数学、大学院では計算機数学、医学部に來てからは統計学と、行った先々で殆ど関係ない分野を勉強することになり苦勞した。それは私の不明の故であったが、振り返ってみれば、最善の道だったという気もする。原研放射教室の1980年の年報に、「数学からも離れ、まだ30年余生きないといけない」と絶望的な文を書いたりしたが、社会が必要としている技術と、自分が身に付けた技術とが異なるのは普通のことなのだ。そんなことで挫けていたのでは、この世の中は生きていけないのである。何度も、地獄に迷いこんでしまったと後悔したが、その度に仏が現れ救ってくれた。学生時代からの夢であった米国留学もでき、国籍、専門を問わず大勢の尊敬できる方とも出会えた。様々な分野の方との真

剣な共同研究の経験を経て、漸く自信を持って教壇に立てるようになった。数学の世界しか知らなかったら、学生に伝えるべきことは何も無かったかもしれない。研究面でも干上がっていただろうと思う。因みに今年度の講義科目は；医短で数学、統計学、情報科学、医療情報学；全学教育で統計学；教育学部で確率論1と確率論2；長崎女子短大で統計学；宮崎大学で情報工学特別講義、と多彩であるが、根底を流れるコンセプトは共通しており、具体的な社会問題への統計情的分析法といえる。10月からは新設の環境科学部に移動する。医学部12年半と医療短大12年半を過ごした思いで多い坂本キャンパスから離れるのは寂しいが、環境問題へのチャレンジを通じてまた刺激的出会いがあるだろう。

資料センターにいたときは、統計学と医学知識修得の為に、週2回勉強会をしていた。一方水泳同好会も設立し、週2回はプールで泳ぎ、合宿も度々企画し参加した。良く飲みにも行った（大井さんと豚吉？、千春ちゃんと千代？）。こんなに無駄な時間を使う呑気な研究者は余りいないであろう。家族からさえも水泳なんかやめろ、というプレッシャーを浴びて後ろめたい思いでいたのに...。しかし米国に行って驚いた。皆5時になると研究室を飛び出して、ニコニコしながらソフトボール場やバレーボール場に集まり、真剣に遊ぶのである。真っ直ぐ家に帰ると、家の補修や子育て等の家庭サービスである。しかも彼等の生産するオリジナル論文は、日本の統計学者と比較して質量ともに桁違いである。彼らにとっては、生きることそのものが研究能力を育

くむことなんだという気がする。一方日本では、寄らば大樹の陰、という格言があるごとく、生きることはもたれあいなのだ。ともに厳しい競争社会には変わらないが、競争の質が違う。日本の競争社会では、純粹に研究マインドの強い人は結局多数決で負けるというのは偏った見方であろうか。（日本の各界トップのモラルの無さとも関係している気がするのだが.....。）例えそうであっても、負けるが勝ちの格言を信じたい。

過去20年における欧米の生物統計研究は急激な発展を遂げているが、日本では、社会構造の違いからか、生物統計研究は衰退気味で、今のままでは、天然記念物のトキが絶滅する前に、日本の生物統計学者が消滅するといえる（ $p < 0.05$ ）。しかし、O-157、エイズ被害の問題がきっかけになり、厚生省に生物統計専門家が採用されることに成ったと聞く。いよいよ日本にも生物統計学の根付く時代が来たのだ（ $p < 0.1$ ）。資料センターは全国でも稀な生物統計学の研究機関であり、三根先生、近藤先生、本田先生の医学研究への貢献は大であるが、組織的に完全とはいえなかった。来年度の改組では組織的にも充実し、日本の生物統計研究のメッカとなる土壤のできることを期待する。この改組を機会に、また20年前の頃のことを思いだして、夢を追いかけて生きましよう。もう研究できる機関は僅かしかないのです。小さくても美しい花を咲かせましよう。